

令和6年度 全国学力・学習状況調査結果（大崎市）について

令和6年9月 大崎市教育委員会

I 調査の概要について

- 【調査目的】(1) 義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。
 (2) 学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。
 (3) そのような取組を通して、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

【調査日】 令和6年4月18日（木）

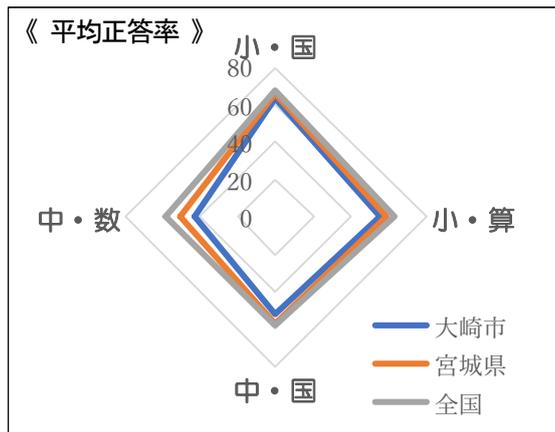
【調査対象・内容】 ○小学校第6学年（国語・算数・質問紙） ○中学校第3学年（国語・数学・質問紙）

II 各教科の結果について

《 平均正答率 》

校種 学年	教科	問題数(問)	大崎市	宮城県	全国	全国との差
小学校 6年	国語	14	8.8	9.3	9.5	-0.7
	算数	16	8.9	9.5	10.1	-1.2
中学校 3年	国語	15	7.8	8.6	8.7	-0.9
	数学	15	6.8	8.2	8.4	-1.6

※中学校4校は、当日修学旅行のため、上記の結果に含まれていません。



小学校国語

- 集めた材料を分類したり関係付けたりして、伝えたいことを明確にすることができる児童が多い。
- 情報と情報との関係付けの仕方、図などによる語句と語句との関係の表し方を理解し適切なものを選択することができる児童が多い。
- 日常的に使う漢字を、正しく書くことができる児童が少ない。
- 「話し言葉」と「書き言葉」との違いに気付くことができる児童が少ない。

中学校国語

- 目的や意図に応じて、集めた材料を整理し、伝えたいことを明確にすることができる生徒が多い。
- 行書の特徴を理解している生徒が多い。
- 表現の効果を考えて描写するなど、自分の考えが伝わる文章になるように工夫することに課題が見られる。
- 目的に応じて必要な情報に着目して要約することに課題が見られる。

小学校算数

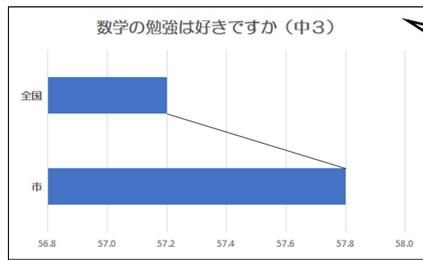
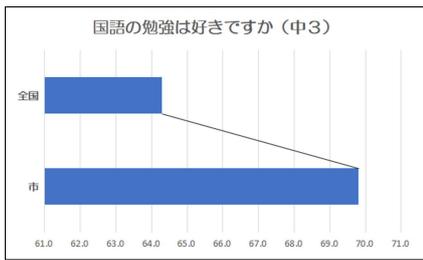
- 数量の関係を、□を用いた式に表すことができる児童が多い。
- 直方体の見取図について理解し、かくことができる児童が多い。
- 除数が小数である場合の除法の計算をすることに課題が見られる。
- 除数が小数である場合の除法において、除数と商の大きさの関係について理解することに課題が見られる。
- 問題場面の数量の関係を捉え、式に表すことに課題が見られる。

中学校数学

- 複数の集団のデータの分布から、四分位範囲を比較することができる生徒が多い。
- 二つのグラフにおけるY軸との交点について、事象に即して解釈することができる生徒が多い。
- 連続する二つの偶数を、文字を用いた式で表すことに課題が見られる。
- 目的に応じて式を変形したり、その意味を読み取ったりして、事柄が成り立つ理由を説明することに課題が見られる。
- 事象を数学的に解釈し、問題解決の方法を数学的に説明することに課題が見られる。

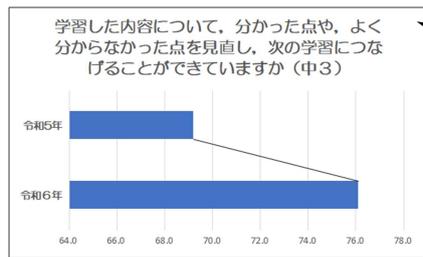
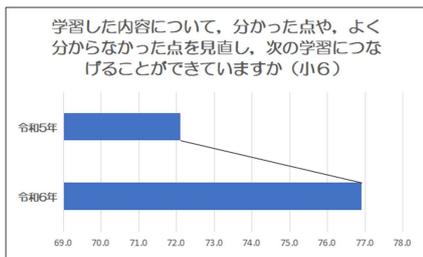
III 質問紙調査結果について

○ 「国語・数学の勉強が好き」と回答した生徒（中3）の割合は、全国の値を上回っている。



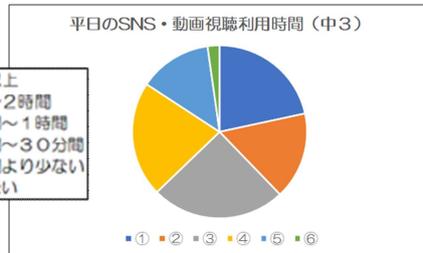
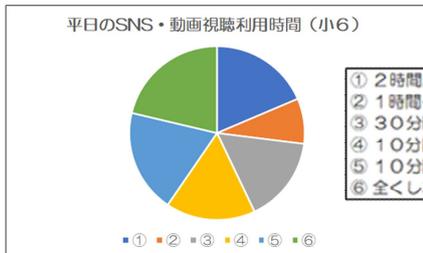
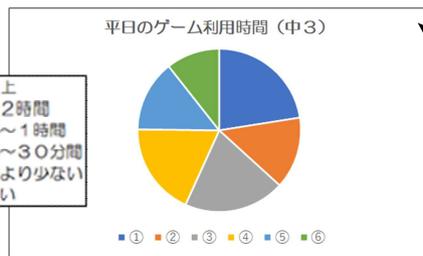
○児童生徒一人一人により目を向け、意欲を持たせる学習を展開することで、児童生徒の「やる気」を引き出した更なる「授業改善」を目指す。

○ 「学習した内容について、分かった点や、よく分からなかった点を見直し、次の学習につなげることができた」と回答した児童・生徒の割合は、昨年度の大崎市の値を上回っている。



○児童生徒の「わからない」「教えて」というつぶやきを大事にした、協働による「授業改善」を行う。また、授業の「振り返り（復習）」や「先取り学習（予習）」を行うなどの家庭学習の充実を図る。

● 「普段（月曜日から金曜日）、1日当たり2時間以上、テレビゲーム（コンピュータゲーム、携帯式のゲーム、携帯電話やスマートフォンを使ったゲームも含む）をしている」と回答した児童・生徒の割合は、県や全国値を上回っている。

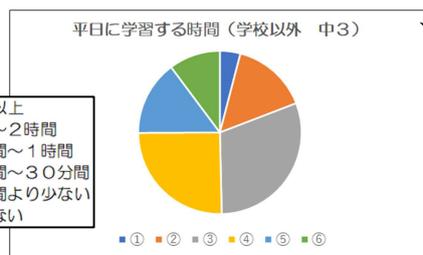
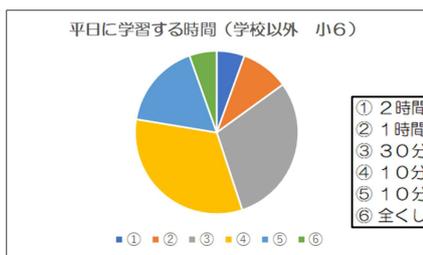


●平日のゲーム利用時間。
 2時間以上・・・小学生：58.8%
 中学生：56.3%
 4時間以上・・・小学生：25.8%
 中学生：22.3%

●平日のSNS・動画視聴利用時間
 2時間以上・・・小学生：43.0%
 中学生：62.2%
 4時間以上・・・小学生：18.6%
 中学生：21.4%

脳の発達や学習にも影響があるので、
 ・「メディアは1時間程度」と決めるなど、
 アウトメディアコントロールが必要

● 「学校の授業時間以外に、普段（月曜日から金曜日）、1日当たり1時間以上勉強をする（学習塾で勉強している時間や家庭教師の先生に教えている時間、インターネットを活用して学ぶ時間も含む）」と回答した児童・生徒の割合は、県や全国値を下回っている。



●平日に勉強を30分以下する、または全く勉強をしない
 小学生：22.4% 中学生：24.9%

小学生は5人に1人
 中学生は4人に1人の割合

家庭学習の確保が学力向上に必須

児童生徒の「学びに向かう力の育成」を → 児童生徒の意欲を引き出す「授業改善」
 ・目的を持った「主体的な家庭学習」の充実

IV 大崎市教育委員会の対応について

大崎市は令和4年度から全ての小・中・義務教育学校において、「学力向上マネジメントおおさき方式」の4つの柱を核に、基礎的・基本的な学習内容の定着と、思考力・判断力・表現力等の育成を目指した授業改善と児童生徒一人一人の実態に応じた指導を推進することにより、学力向上を目指してきた。今回の調査から、以下の点について重点を置き、さらなる取組を強化していきたい。

(1) 学力向上4つの柱に関する取組

① カリキュラムマネジメントの工夫

- 各学校が作成した「学力向上年間計画」をもとに、学力向上のPDCAサイクルの循環促進する。また、その取組をGoogle drive上で市内全ての学校で共有し、自校の取組に生かす。

② 授業改善

思考力・判断力・表現力などの能力の育成を目指し、個々の生徒の特性に合った指導を実現するための授業内容の改善を推進していく。また、児童生徒が自ら積極的に学ぶ、「学習者主体の学び」の授業づくりを通して、自立した学習者の育成に努める。この取組において、大崎市教育委員会は指導主事の訪問や助言を通じて以下の支援を行う。

- 授業の始めに「目標（めあて・ねらい）」を示す活動を工夫することにより、学習意欲を高めたり、本時の見通しを持たせたりする。
- 授業の最後に「振り返り」や「適用問題」の時間を工夫する。「ねらい」を踏まえた振り返り活動を通して、何ができるようになったのか、何が分かったのかを児童生徒に具体的に実感させる。
- 「おおさきスタンダードのみり」や「授業評価シート」を活用し、県教委が推進する「子供の学びを支援する5つの提言」を意識した取組がなされるよう推進する。

③ 集団づくり

- 総合質問紙調査「i-check」、生活アンケート等の活用による児童生徒の実態把握を生かした、共に認め合い、学び合う集団づくりを推進していく。

④ 小中連携

- 指導主事訪問等での授業を中学校区内の学校同士で参観し合ったり、合同での授業研究会などを開催したりする取組を推奨し、各校種の学習に対する理解を深めることで、スムーズな学びの接続を図るようにする。
- 市教委主催の研修会を通して、中学校区内の小・中学校が連携し、児童・生徒の実態について共有し、各校の学力向上につながる取組を行う。

(2) 各種調査結果の活用

- 全国学力・学習状況調査の算数・数学において、早期の自校採点・分析を行い、日々の授業改善に取り組むよう指導・助言する。
- 市教委作成の「授業改善シート」や「ワンランクアップシート」を用いて調査結果の分析を使い、それをもとに今後の改善計画を立案させ、教職員の共通理解のもとでの授業改善を促す。
- 学力推進委員会や授業づくり研修会等において、全国学力・学習状況調査の結果の分析をもとにした研修を行い、各校の授業改善に生かしていく。

(3) その他の学力向上の取組

- 県学力向上マネジメントアドバイザーによる、学校個別訪問、中学校区訪問（年5回）に同行し、各校の取組状況の把握と指導助言を行う。
- 生徒会やPTAの協力のもと、児童生徒が目標を持ってメディアコントロールに取り組むとともに、家庭学習が習慣化できるよう支援する。また、小中連携を図り、中学校区での更なる展開を推進する。
- 東京書籍のタブレットドリル（タブドリLive）や、読売新聞の「よむYOMUワークシート」を有効利用し、児童生徒の学習の一助とする。
- **大崎市の家庭学習について、実態をもとに見直しを図り、家庭と連携して「主体的な家庭学習」を目指す。**
- **「学力向上1・2・3運動（10月～2月）」を行い、家庭と連携して「家庭学習の時間確保」を目指す。**